

【論文】

## 戦争の時代における無教会運動

—金澤常雄—

黒川 知文

「アジア太平洋戦争中の教会に対する法廷には、裁判官と検事はいても弁護士はいない」

キリスト教会は戦争に協力したと、これまで厳しく批判されてきた。しかし、教会はどのように戦争に協力したのであろうか。戦時中、若き教会員であった加藤常昭は、戦争の時代を生きたキリスト者として以下のように主張している。

戦後、戦時中のキリスト教会の歩みについて批判的言論を耳にしてきました。その言葉には正しいところがあるとは思いますが。……しかし、……教会の苦悩と労苦に、しっかり目を留め、耳を傾けた上での評論であったかどうかには疑問を持っています。われわれは、一所懸命に信仰に生き、奉仕に生きたのです。福音とは何かを問い続け、説き続けたのです。あの頃経験したひたむきな信仰の姿勢を、今どこに見出し得るかさえ問う思いがあります」<sup>1</sup>

戦争時代の史料を綿密に分析すると、現代とは全く違う状況にあったことがわかる。そして教会の多くは「敵である欧米列強を倒せ」ではなくて、「早期に戦争に勝利して、アジアを欧米の植民地支配から解放して、キリスト教的な平和な大東亜共栄圏をつくろう、そのためにも伝道に力を入れよう」と唱道して、戦争に「協力」したことが確認できる。「侵略戦争」とい

う認識は見出せない。国策を批判して東京帝国大学助教授を辞した矢内原忠雄さえも、以下のように、戦争が開始されると非戦論は主張せずに、国家的危機に「帝国臣民」として協力している。

非常時の福音：此好戦的非常時の空気に抵抗して非戦を主張することはできない。此の非常時の空気の中にあつて少しも肩身の狭い思ひ、又は地位の危い思ひをしない程に無感覚となり、或は妥協的迎合的となつて居ることは基督者として恥づべきことではなからうか。…我々は時を得るも得ざるも、迫害が来るも来らざるも、真理を真理として信じ且つ証言するだけのことである<sup>2</sup>。

1931年から1945年にいたる戦争の時代におけるキリスト教の主な対応は以下ようになる。(表1参照)

表1 15年戦争と教会の対応

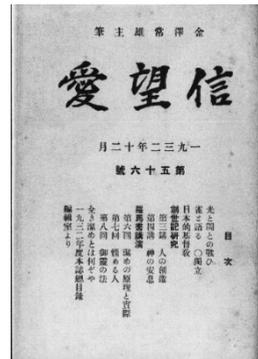
| 西暦 昭和   | 時代状況              | プロテスタント                     | カトリック                   | 正教会 |
|---------|-------------------|-----------------------------|-------------------------|-----|
| 1931 6  | 満州事変 9/18         | 日本宗教学平和会議                   |                         |     |
| 1932 7  | 満州国建国<br>五一五事件    | 宗教学家教育家懇談会                  | 上智大学事件                  |     |
| 1933 8  | 日本、国際連盟脱退<br>滝川事件 | ホーリネス教会、中田重治の監督職解任<br>満州伝道会 | 上智大学に配属将校               |     |
| 1934 9  | 満州国皇帝溥儀           | 神の国運動終わる                    |                         |     |
| 1935 10 | 美濃部達吉天皇機関説攻撃      | 同志社講道館に神棚設置<br>福井二郎、熱河伝道    | 文部省、全司教・教区長に国体明徴再生命通達命令 |     |
| 1936 11 | 二二六事件<br>日独防共協定   | ホーリネス教会分裂                   | 教皇庁、信徒の愛国心表現の徹底期す       |     |

|      |    |   |   |                      |                   |
|------|----|---|---|----------------------|-------------------|
| 1937 | 12 | 盧溝橋事件・日中戦争始まる 7/7<br>南京占領 12/13<br>南京虐殺事件 | 連盟に皇軍慰問事業部<br>矢内原事件 12/4<br>第一回農村教化協議会  |                      |                   |
| 1938 | 13 | 大内兵衛ら検挙<br>国家総動員法                         | 同志社に御真影奉安殿  |                      |                   |
| 1939 | 14 | ノモンハン事件<br>国民徴用令公布<br>宗教団体法成立             | 灯台社の 91 名検挙 中<br>田没   |                      | 山下りん永眠            |
| 1940 | 15 | 宗教団体法施行<br>三国同盟<br>大東亜共栄圏構想<br>大政翼賛会      | 救世軍スパイ容疑事件<br>皇紀 2600 年奉祝全国基督教信徒大会（青山学院於）   |                      | 統理がセルギイより岩沢丙吉に交代  |
| 1941 | 16 | ゾルゲ事件<br>太平洋戦争                            | 賀川ら遣米平和使節団<br>プリマスブラザレン検挙<br>日本基督教団設立認可   | 松岡洋右外相、ピウス 12 世に単独会見 | 特高警察等の介入により臨時公会開催 |
| 1942 | 17 | シンガポール占領<br>ミッドウェイ海戦                      | 教団統理富田満、伊勢神宮参拝 ホーリネス教団 96 名検挙   |                      |                   |
| 1943 | 18 | ガダルカナル撤退<br>学徒戦時動員<br>大東亜会議<br>イタリア降伏     | 教団、戦時報国会結成<br>聖旨奉載基督教大会<br>賀川、反戦行為で尋問<br>大東亜共栄圏にある基督教徒への書簡<br>浅見仙作検挙<br>セブンスデー 39 名検挙 | 大東亜神学校設立を決定          |                   |
| 1944 | 19 | 神風特攻隊<br>東京初空襲                            | 小野村林蔵、不敬で検挙<br>教団、「決戦態勢宣言」<br>全国一斉必勝祈願祈禱会<br>大日本戦時宗教報国会                               |                      |                   |
| 1945 | 20 | 沖縄に米軍上陸原爆投下<br>ポツダム宣言                     | 聖公会主教、憲兵隊に拘禁  | 『日本カトリック新聞』休刊        | セルギイ憲兵隊に拘引後没      |

戦争の時代において、キリスト教運動はどのように変質したのであろうか。

アジア太平洋戦争の時代における教会一般に対しては、「戦争に協力した」として戦争責任を追及する批判的な研究が支配的であるが、最近になって、客観的に分析する研究がなされている<sup>3</sup>。また、無教会運動と戦争に関する研究は少なく、戦争中に発行された無教会の雑誌の内容を分析したものは見受けられない<sup>4</sup>。

本稿では、無教会の代表的指導者が戦争の時代に発行した雑誌の内容を分析して、無教会運動が戦争の時代にどのように対応したのかを探る。具体的には、内村以後の無教会運動の指導者の一人である金澤常雄を対象にし、彼が主筆として一九三一年から一九四五年まで発行した信仰雑誌である『信望愛』を史料としてその内容を分析する。



内村鑑三記念講演会 大阪中央電気倶楽部にて 1933年4月3日

(前列左から) 金澤常雄, 塚本虎二, 畔上賢造, 黒崎幸吉

(後列中央) 矢内原忠雄, [その右] 三谷隆正

## I 戦争の時代における金澤常雄

金澤常雄は、1892年に群馬県甘楽郡高瀬村に生まれ、日本組合教会甘楽教会で洗礼を受けた。第一高等学校に入学して内村鑑三聖書研究会に出席し柏会に属した。1918年に東京帝国大学法科を卒業し、内務省官僚となり神奈川県庁に赴任するが1919年に官僚を辞して、北海道の家庭学校で働く。その時に回心を経験した。1920年上京して翌年には日本組合教会桐生教会牧師、1922年から札幌独立教会牧師になった。1927年に東京に戻り翌年から祖師谷で独立伝道を開始して伝道雑誌『信望愛』を刊行した<sup>5</sup>。同雑誌は1944年6月の266号で一時廃刊になり戦後1947年1月に復刊した。同雑誌は、1958年3月に死去するまで継続された。その主な内容は以下である。

### 1 絶対的非戦論

満州事変は1931年6月に開始されたが<sup>6</sup>、同年10月以降に金澤は「我はひとり嘆く、義と平和を表徴する日東帝国の日章旗が其の武装の故に旗色の鮮明を全く失へる事を」<sup>6</sup>、「凡て剣を取る者は剣にて亡ぶ。大なる禍害が此国に来らないと誰が断言し得るか」（以下傍線金澤）<sup>7</sup>、「日本の政治家に一人の徹底せる平和主義者なきを痛歎します」<sup>8</sup>と述べて、絶対的非戦論を展開している。

翌年には、「日本は国を挙げて帝国主義の奴隷となり果てた。日本は目前の利益の為に正義を棄てたのである…今の時の日本の悪事は必ず幾倍の災禍となって日本に報い来る日のあるべきを」<sup>9</sup>と、日本を「帝国主義の奴隷」「日本の悪事」と厳しく批判する。そして、真の平和は「イエスの十字架と再臨」にあると述べている<sup>10</sup>。

1932年1月28日に上海事件が起きるが、この時も金澤は「禍ひなるかな日本！ 汝は隣国に対する第一の不義に加へて茲にまた第二の不義（上海事件）を犯してゐる」<sup>11</sup>と日本を断罪する。そして「長くも平和を愛し

給ふ聖上陛下の御胸の痛みは如何ばかりであろう」と述べ、金澤の天皇崇敬が理解できる。

日本の罪を指摘して、金澤の絶対的非戦論は展開している。日本の罪として金澤が指摘したのは、以下のように、日本の軍備、虚偽報道、赤化ファッショ化、「満州事変という怪物」、「政党財閥の不忠不義」等である。

・「私は日本国が強き軍隊を以て世界に覇たることを望まない…剣を取る国は必ず剣を以て亡ぼされる」<sup>12</sup>

・「偽る者は新聞である。特に今度の日支事変に関して日本の凡ての新聞の報道が如何に事実に反する数多の虚偽を交へしかを知りて私は呆然とした…今や日本国は大なる危機に臨んでいる…極左派の陰謀に加へて極右派の直接行動が暴威を振はんとしてゐる。何人も心を静めて預言の書を読むべきである」<sup>13</sup>

・「経済国難の日本は更に満州事変の結果、連盟に裁かれて世界から孤立した。時も時、三陸地方におそるべき震災は襲ひ来つた。然も国民は日々に赤化しファッショ化しつつある。ああ、次に来るものは何か」<sup>14</sup>「ああ、満州事変という怪物よ、そこに日本の大きな罪が潜んでゐるのである」<sup>15</sup>

・「日本の平和的使命　されば私は世界の混乱時代に当りどうか愛する祖国が世界を率先して平和を愛する国となって欲しいのです。思ひきつて軍備を撤廃して世界平和を提唱して欲しいのです。然るに満州事変以来の日本は全く反対の途を辿つてゐます」「軍備全廃と世界平和の提唱」!<sup>16</sup>

・「非常時の真相　日本人に罪があります。日本国に罪があります。…政党財閥の不忠不義…五・一五事件…マルキシズムかファシズムかモダニズム化の奴隷になつてしまつたのであります。…自ら負ひて苦しまねばならぬ己が罪の責任をば隣れむべき隣人に転化して己れ自らは何の罪も無しと言ひ且つ東洋平和の主動者なりと宣してゐます。…「平和の為の軍備」といふほど大なる偽善はありません。…日本が自国の為でなく正義を以て世界の為に生きる時に日本人も日本国も救はれます」<sup>17</sup>

金澤は、日本が戦争に進む状況においても、以下のように世界平和を希求

している。

・「平和の君今や欧州の天地には戦雲急である。また太平洋を中心として東亜の天地も危機を孕みぬ。斯くして世界平和の理想は遂に夢であらうか」<sup>18</sup>

1933年において、金澤は、他の信仰雑誌が当局から発売禁止となり、金澤自身も雑誌発行禁止を命じられたが、以下のように、発行を継続した。

・「インマヌエルと我が日本 釘宮氏の「復活」の如き既に幾度か発売禁止の厄に遭つてゐる。藤沢氏の「求道」も発禁にあつてゐる。本誌もまた抹消を命じられた。…私はイザヤの立場をとる。私は少数の若き友の間に御言を堅うすることに全力を傾ける」<sup>19</sup>

1936年の二二六事件の日には、「暗黒か光明か：未曾有の不祥事件（二二六事件）が突発した日の夜は祖国を思って殆ど眠れなかった。…ああ起るべからざること遂に起こりぬ。…今やサタンの魔手は祖国をばいたく打ちふるふと雖も、神よ此国を守りて永遠の安泰に導き給へ。」<sup>20</sup>と、二二六事件が「サタンの魔手」であったと断じている。しかし、そのような最悪の時ににおいても福音を宣教することを、金澤は以下のように勧めている。

・「福音宣伝の絶好期：今は最悪時である。凡ての人が絶望的な不安を感じはじめた。イエスキリストの救を除いて何處に光があらうか。されば今は福音宣伝の絶好期である」<sup>21</sup>。

・基督教平和：基督者は非戦論者たらざるを得ない。而して少くとも私は絶対非戦論者たらざるを得ない<sup>22</sup>。

・伝道の好期：今や日本人は靈魂の救を求めて喘いでゐる。伝道の絶好の機会である。絶対非戦：私は恩師記念講演会に於て恩師の絶対非戦の立場を述べながら実は自分の立場を千六百の耳に向かつて証したのである<sup>23</sup>。

・正義の所在：真の正義と平和とは神を恐れ神を信ずる個人と国とによりてのみ実現する<sup>24</sup>。

1940年3月に南京に新たな中国の政府が成立した時に、金澤は「三月三十日に南京に支那の新政府が成立した。…日支間の平和の回復の速やかな

らんことを切に祈って已まない」<sup>25</sup>と平和の回復を望んでいる。そして、キリスト教により国家間の誤解を解くことを以下のように述べている。

・「如何なる基督教が我国に必要か（上）：決戦状態にある祖国にとりて基督教は不要なりとの声をきく。従ってまた基督教の伝道の如きは平時的事業に属するもので此の日常時には中止すべきであると主張する者もあるといふ。…我らは真に祖国に必要な基督教の在る事を示して基督教に対する誤解曲解を解き且つ同胞の斯教への関心を喚起したいと思ふ。」<sup>26</sup>

一方、1932年3月に満州国が建設された後、金澤は欧米批判も展開する。金澤は、欧米物質文明の「害毒」は、「共産主義」と「アメリカニズム」と「極端な国粹主義」であると断じ<sup>27</sup>、また、連合側にもドイツ側にも罪があり、キリストの十字架以外に平和はないと述べている<sup>28</sup>。さらに、キリスト教は欧米諸国を離れ<sup>29</sup>、欧州戦争は神の裁きであるとさえ断じている<sup>30</sup>。

## 2 日本の基督教

金澤は欧米文明と欧米のキリスト教を「三つの蛙」の比喻で批判する。それは、以下のように、「米国の享楽主義」、「共産主義」、「軍国主義」である。と同時に、日本的キリスト教を以下のように推奨していく。

・現代世界のハルマゲドン疑ひもなく日本の東京である…三つの蛙とは何であるか。曰くアメリカニズムと名づくる享楽主義、マルキシズムと名づくる共産主義、ファシズムと名づくる軍国主義。…キリストは日本をば栄光の照り出づる国たらしめんと欲し給ふ<sup>31</sup>。

欧米の文明とキリスト教を批判して、金澤は日本的基督教を推奨する。以下のように日本的基督教とは、「国民精神を成就し完成し」、「忠君道徳を堅う」するものである。この日本的基督教において日本精神とキリスト教との融合を見ることが出来る。

・日本的基督教とは何ぞや…それは日本人を日本人として救ふ基督教である…光輝ある二千数百年の歴史を一貫して流れ来りし国民精神をば成就し完成するものである。…之は此国に真の正義と平和とを植え、罪よりの解

放と来世希望とを与へ、忠孝道德を堅うし得るものである。之によりて日本は全世界に向つて真理の貢献をなし得るに至るであらう<sup>32</sup>。

・日本的と云ふ意味は日本固有の良き国民精神を更に伸長し完成するといふことであつて、かかる基督教を日本的キリスト教と申して差支えありません。…キリスト教が我が国体と合はないといふ様に考へるのは誤解であります真の愛国心なるものは、実はキリストの福音の外にないと言っても過言ではないと思ひます<sup>33</sup>。

日本は「神の栄光が照りつける国」であり、「全世界に真理を宣べる貢献をする国」である。金澤は、さらに、日本的基督教は、神道、仏教、武士道を完成するものであり、日本を救うのもであると、以下のように述べている。

・日本を救ふキリスト教は日本的でなければなりません。即ち神道の清淨と正義を愛する精神、仏教の平和を愛し来世を慕ふ心、また罪より救はるるための他力廻向、これらは何れも真のキリスト教によりて完成せらるるものであります。又武士道の君の馬前に生命を棄てるといふ精神は真のキリスト教によりて父なる真の神への全き献身と服従の精神となるのであります。第四に忠孝道德や愛国心に就ても聖書こそ之らを堅うするものであります。然り日本的キリスト教のみが日本を此の危機から救ひうるのであります。…どうかして日本をば神の御旨に添ひ得る輝かしい国と為したいではありませんか<sup>34</sup>。

金澤にとって日本的基督教とは、無教会のことであつた。それは福音を變えるものではないと以下のように述べている。

・此の東亜の島帝国に三千年來ながれ來つた祖先の血を受けて私は生きてゐるのだ。私にはパンよりも玄米、バタよりも沢庵、洋服よりも和服、欧米流の教會的基督教よりも日本流の無教會的基督教の方がどんなにシツクリするかわからない。日本的基督教の邪路 然しながら日本的基督教とは日本人のハート（心情）を以て譲りてイエスの御霊を受くることを意味するのであつて、純粹なるイエスの福音そのものを改変して性來の日本人の

要求に適應せしめんと欲するが如きは日本の基督教の邪路である<sup>35</sup>。

さらに金澤は、「日本の基督教とは何ぞや 儒教も仏教も神道も武士道も大和魂も夫れ自体では真理に代る事は出来ない。所謂『日本精神』なるものも夫れ自身には積極的に日本人を救ふ力を有してゐないのである」(36)と述べ、「日本精神」ではなくて、日本的基督教こそが日本人を救う力があるとしている。

窮極的には、日本精神は旧約聖書であり、日本の代表的な宗教者は旧約聖書の預言者に等しいとまで、以下のように金澤は考えた。

・旧約としての日本精神 儒教も仏教も大和魂も武士道も平民道も忠孝道徳も神社崇拜も凡てが旧約だ。そこから罪の解放と永遠の生命とは現れて来ない。どんなに日本精神を学んでも真の生命は其中から湧かない。だがキリストの光と生命を受けてのみ日本精神は完成する。然り日本人の基督教は欧米人の模倣であつてはならぬ。之は日本精神の基礎の上に築かれねばならぬ<sup>36</sup>。

・真如上人、源義家、源信、法然、親鸞、日蓮、宣長、藤樹、松陰、南洲等が昭和の時代に生まれたならば心から感謝してイエスを迎え奉つたであらう<sup>37</sup>。

・孝道：基督教は一言にして尽せば孝道である<sup>38</sup>。

・(注意すべき二つの立場) 一は所謂日本の基督教と呼ばれるべきもので、時勢に迎合して日本は此の儘で神の国であり日本のなす事は凡て正義であるとなし基督教をば国家に隷属せしむる立場であります。他の一は之とは反対に愛国心もなく同時に福音もなく、聖書を信ずるが如く信ぜざるが如く、国を愛するが如く愛せざるが如く一といふ立場であつて、不幸にも今日のプロテスタント教会が斯かる立場に居ります。日本は基督教により其の国体の真精神をいよいよ豊かに發揮し得べく、基督教は日本に於て欧米に未だ見ざる独特な光彩を放つてありませう<sup>39</sup>

以下の記述においても、日本精神と基督教の融合、そして合一を見ることが出来る。

- ・聖書と日本精神：驚くべきことは日本精神の特色たる清浄、正義、至誠、平和、忠孝等が悉く聖書の精神たることである<sup>40</sup>。
- ・法然上人を憶ふ：彼もまた旧約日本の預言者の一人である<sup>41</sup>。

### 3 天皇崇敬

金澤にとって、天皇陛下は神に近い特別の存在であった。天皇は「日本精神の結晶」であり、希望と平和、平安の存在であり、天皇を抱く日本は戦争にも勝利すると信じていることが以下の多くの記事からわかる。

- ・真に日本を愛すると云ふならば支那を愛さねばなりません、米国を愛さねばなりません、世界を愛さねばなりません。即ち世界は日本と共に栄ゆべきものであります。…恐れ多くも、明治大帝の御製に「四方の海みな兄弟と思ふ世に、など波風の立ちさはぐらん」と仰せられてありますが、之こそ日本の真精神を歌ひ出されしものと拝察せられます<sup>42</sup>。
- ・御製「天地の神にぞ祈る朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を」恐れ多きことながら、聖上陛下の故に私は
- ・日本国について希望を失ふことが出来ない私は心を切にして玉体の平安を祈らざるを得ないのである<sup>43</sup>
- ・何よりも先づ天地の神を畏れなければなりません。畏くも聖上陛下の御製に次の如くあります。天地の神にぞ祈る朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を これぞ真に世界の平和を愛し給ふ大御心の発露であります。これぞ真の日本精神の結晶であります。…平和を祈り給ふ御心に添ひ奉ることこそ真の忠君です。…神は必ず日本国を守り戦はずして勝たしめ給ひます<sup>44</sup>。
- ・忠孝道德を聖化するものはキリストのみである。国民精神はキリストによりてのみ其の精華を発揮し得る<sup>45</sup>。
- ・更に今一つ大なる事実がある。そは畏くも聖上陛下が敬虔の念いとも深くおはしますことである<sup>46</sup>。…真に敬虔なる祈の歌である。治者として最も大なる御器にてあらせ給ふ。斯かる統治者を与へられたる事は真に天祐である<sup>47</sup>。

とりわけ、1934年12月23日における日嗣の御子（現上皇陛下）の誕生の時に、天変地異が見られたとする金澤の以下のような記述は、イエス・キリストの誕生の状況に類似したものである。

・日嗣の御子の御誕生 ○昨年十二月二十三日午前六時三十九分、皇太子殿下御誕生遊ばさる。日本国民として斯くばかりの歓喜はない。私は謹んで衷心より奉祝する者である。○御誕生の四日前、即ち十二月二十日の夜に我らは天に稀しき現象を観た。即ち三日月を中心に金星と土星とが日没の西天に現はれ先づ金星が四時四分より月の後ろに隠れ五時十六分に再び姿を現はし次に土星が六時三分から月の後ろに隠れ七時一分再び現はれた。斯かる現象が実に稀有のことで万年にただ一度起る位なものであるといふ。○この事は偶然とは思へない。…我が皇太子殿下の御誕生に対して何か深き天の御意を暗示するものであるとの直感を私は禁ずることが出来ない。○第一に神が我が皇室を祝福し給ふ事実である。…我らは皇室に対し陛下に対して深き畏敬と親密とをもっている。之は我らの本能に根ざす情操である。…即ち日本国は国民凡てが陛下に対して忠誠を尽し奉ることによってのみ真の立憲政治は行はれ世界の大混乱の中にも安泰でありうるのである。第三に御子は将来に於いて世界平和の為に大なる貢献を為し給ふのではあるまいか。然り神は我が皇室を中心として新日本を榮えせしめんと欲し給ふのであらう。…日嗣の御子を与へられたる新日本はこの暗黒の世界に向かつて真の愛と平和とを行はねばならぬ。・ハルマゲドンの戦闘 英明にして平和の熱愛者たる聖上陛下は此の国に君臨し給ひ一昨年末には日嗣の御子を恵まれ給ふ。これ神が日本国を危機より救ひ永遠に榮えしめん為の徴にあらずや。ハルマゲドンの戦はいよいよ烈しくなる。…実に斯くも福音が生命懸けで興りつつあるのは全世界に於て日本あるのみ<sup>48</sup>。

金澤は、二つの希望の光を提示する。それは、天皇陛下とキリスト教である。さらに、キリスト教が国体に反しないと以下のように主張する。

・或る感想：併し暗黒の中に二つの光が照る。第一、畏くも聖上陛下には

真の治者にてあらせ給ふ事。第二、キリストを信ずる事によりて忠君愛国の精神に燃ゆる人々が全国に散在する事。クリスチャンならざれば真の愛国者たるを能はず。内村先生の残されたもの：私共はクリスチャンの信仰が国体に反しないことを確信してゐるに留まりません。クリスチャンならざれば真の愛国者たり得ずとまで確信してゐます<sup>49</sup>。

・編集室より：世界は動く。欧州は没落し東洋は目醒めつつある。…祈る、日本をして欧米物質文明の徹を踏むことなく靈的精神的新文明の発祥地たらしめんことを。最も感謝と慶賀にたへざる事は晩秋また御皇室に義宮正仁親王殿下御誕生遊ばされし御事である。一昨冬の皇太子殿下御誕生と併せて暗き世に対する最も大なる光であり平和と正義との徴であると信ずる。ああ、天恩は日の本に豊かなるかな<sup>50</sup>。

金澤はさらに、天皇制は「日本のキリスト者の最大の光栄」「基督教は国体の精華を發揮し完成する使命」をもつものだと以下のように述べている。

・信仰短言：万世一系の皇室を上に戴き奉り、陛下と祖国の為に生命を捧げて生きることは大和の基督者の最大の光栄でなければならぬ。この光栄を自覚せざる基督者は真の日本人でないばかりでなく真の基督者でもない。聖書の基督教は日本の国体の精華を發揮し完成する為に最も大なる使命をもつてゐる。この点で儒教も神道も仏教も旧約日本の光であり得たが新約日本の光とはなり得ない。…万世一系の皇統の故に、大和心を失はざる少数の民と基督者の故に、また富嶽の故に神は祖国を棄て給はないであらう。日記断片：二月二十六日 神の恩恵はなほこの国に残されてゐる。陛下の御成徳を今度ほど切に仰がしめられたことはない<sup>51</sup>。

金澤は、以下のように日本人は神の選民だとさえ、論じている。

・日本国が神に選ばれた国であるといふ信仰は古くから先覚者によりて鼓吹されて来てゐる。ことに皇室を中心とする君民一体の国体、また之に伴ふ忠孝道德こそ日本が世界に果すべき使命の土台たるべきものである。…たしかに日本は東西両文明の長を取り而して独特の文明の光を世界に放つべき使命があるにちがいない。…この時にあたりいかにして忠孝道德が聖

化され、国体がいよいよ精華を發揮し得て、真に神の国たるにふさはしくあり得るか<sup>52</sup>。

・日本は万世一系の皇統を戴いて居り此の国体とファシズムとは断じて相容れない。畏くも明治天皇の賜ひし欽定憲法は国民の権利義務を保障して居るのであるから国民は之を奉体して大御心に添ひ奉るべきである<sup>53</sup>。

・恐れ多き事ではありますが、陛下の御精神こそ正義と平和の上に立ち給ふものであることを拝察致します。…日本国の国体の精神といふものが実に明治大帝並に今上陛下の大御心に遺憾なく発揚せられて居るといふことであります。これは我らの深く感銘する所であります<sup>54</sup>。

1937年、

・現代と基督者：世界が大なる不安の渦中にある。第二世界戦争の噂がたへない。…かかる中にて日本国は特に神に恵まれし国であると思ふ。就中万世一系の皇統と皇室とが榮え給ひ特に明治大帝が国民を赤子として愛撫し憲法を定め給ひし事及び平和を四海に求め給ひし事、而して今上陛下が此の大御心をつがせ給ひし事が、現時の日本をして世界の大暴風の中に立ちながら安泰ならしめてゐる最大原因であると信ずる<sup>55</sup>。

・今日は皇太子様の御誕生日である。…御皇室の御榮えは日本の前途に対する我らの大なる希望である<sup>56</sup>。

1940年には、金澤は、欽定憲法と教育勅語と基督教が「日本国民の道徳の精髓」だと論じている。

・編集室より：また国民道徳の精髓たる勅語の五十年に当り実に国の最大の憂ひが道義心の喪失である。不磨の欽定憲法と教育勅語、その根底に必要欠くべからざる真宗教一同胞は目覚めて真面目に此の大問題を考慮すべき秋だ<sup>57</sup>。

金澤において、キリスト教と天皇制・国体・教育勅語との融合は、このようにして実現していったことがわかる。当局の圧力に屈したからではない。

#### 4 将来の預言、夢

金澤は、幾度か夢を見ている。夢は実現したものもあり、そうでないものもあった。

1933年8月に見た以下の東京大空襲の夢は、米軍の東京上陸はなかったが、12年後の1945年3月10日に、実現している。

・夢を語る 忽ち全市の上空は敵機で充たされ毒瓦斯の撒布やら爆弾の投下によって全市が全滅しました。…敵の陸戦隊が今しも東京湾から上陸しつつあるではありませんか…無教会のクリスチャンは斯かる時には国の為には死ぬのだな、と力強く思った時、私の眼がクラクラとしました<sup>58</sup>。

1935年における、以下の、「軍備拡張の大競争」、「全人類の危機」と日本のキリスト教会が「国家の御用宗教となる危機」に関する金澤の預言も、1941年の第二次世界大戦勃発以降において実現したと考えられる。

・ともぐひ：世界をあげて軍備拡張の大競争が行はれてゐる。…今や全人類は未曾有の危機に臨んだのではあるまいか。…警戒せよ、日本の基督教も国家の御用宗教となる危機が孕まれてゐる事を。…人類は共食ひのために滅亡するであらう<sup>59</sup>。

しかし、1939年の「新しき精神文明が日本より興る」金澤の以下の夢は、全く実現しなかった。

・私の夢：(欧州の戦争の状況) 翻つて東洋を思ふ。今や日支事変も今度の欧州戦争を契機として新階段に入りしことを思ふ。日支相携へて東亜復興の大業に当らねばならない。「光は東方より」といふ言葉が何かしら預言者的な光を帯びて我らの眼前に現れて来た。東洋は東洋独自のものを以て世界に貢献すべき使命があるに違ひない。…欧州の棄てし基督教によりて神の正義の上に立つ新しき精神文明が日本より興ることを夢みつつある私は狂か、愚か<sup>60</sup>。

さらに1943年2月に見た金澤の以下の東京大空襲の夢は、翌年に実現したことになる。

・編集室より：新年二日に私は珍しく初夢を見た。(帝都大空襲の状況)

…身の周囲に常に酷熱を感じ今にも焼死するのではないかとの予想の中に死を覚悟しつつ遂に群衆の居る広場に着くと其處で目が醒めた<sup>61</sup>。

## 5 クリスチャンの戦争参加

戦争に対してクリスチャンはどうするべきか。1933年7月4日に、釘宮辰生と塚本虎二が会合して、以下のように、この問題について話し合った内容を金澤は記している。二人は、日本が占領されれば戦争に参加することに同意している。さらにその時に内村鑑三の「米軍が日本に上陸したら、戦争に参加するが武器はとらずに戦死する」という過去の発言が、披露された。

・日記ところどころ7月4日。「復活」7月号で釘宮さんが塚本さんを訪問した時の談話中に、日本の一角が敵軍に占領される時は銃をとつて戦うことに於いては御二人の考へが一致したといふ。…先生（内村鑑三）は先年日米関係の切迫せる際宣教師方との会合で言明されて曰く、若し不幸にして米軍が我国に上陸せんか、自分は此身を米軍の前に投げ出す、そして私の屍を超えて進軍せよと言ふであろうと。…キリストの十字架を思へば、以下に熱烈な愛国者でも剣は取れない、否、自分を敵の手に付すほどの愛さへも湧く。これこそ本当のクリスチャンスピリットではありまいか<sup>62</sup>。

1936年に生じた二二六事件が解決した時に、金澤は、神と天皇によって、この事件が奇跡的に解決したとし、「キリストと天皇のために」また「福音と日本の為に」命を捨てたいと以下のように述べている。

・而して事（二二六事件）は神の恩恵と陛下の御威徳によりて平穩に解決したのである。奇跡的事実といふべきである。…我らはキリストと陛下の為に更に此身を捧げたく思ふ。福音と祖国の為に此の生命を捨てたく思ふ<sup>63</sup>。

日中戦争が開始された1937年には、以下のように、金澤は出征兵士に同情し、甥や自分の雑誌愛読者が戦地に向かった事を記している。家族や集会では応召に反対していないことがわかる。

・編集室より：○私の旅行中に北支の事変は遂に私共の祈を裏切って全支

に拡大されました。帰途、東北の沿線で出征軍人を贈る万歳の声に幾度か涙を誘はれました。私の甥（謙一）は補充隊付軍医として召集され、誌友の野村実兄は軍医として召集され病院は閉院となりし由<sup>64</sup>。

金澤は、応召されて上海で戦っているクリスチャンに対して、十字架と国のために戦い命を捧げよと以下のように勧めている。

・彼（私の信仰の友で応召して上海の第一戦線に）は真のクリスチャンであり真の日本人であります。平和を愛することを本性とする彼の如き人が戦場に立つてゐるのであります。彼の負ふ十字架のいかに重いかを察するにかたくありません。…此処に集まつてゐる貴方達も若し信仰を以て歩まんとされるならば同じ十字架を負はされるのです。いさぎよく十字架を負ひませう。国の罪を負ひませう。その為に苦しみませう。そして福音と祖国との為にこの生命を捧げませう。必要ならば生命を捨てませう<sup>65</sup>。

さらに金澤は、戦うことにより平和が訪れ、罪がゆるされ、神の国が成就すると以下のように述べる。

編集室より：私の信仰の知人なる北海道五之沢の市川博君は目下上海の第一線にありて、烈しき戦の中で祈と聖書により堅立して居らる。斯かる人々によりて真の平和は来るであらう。罪もあがなはれつつあるのであらう<sup>66</sup>。

1941年12月8日、日本海軍による真珠湾攻撃により太平洋戦争が開始された。金澤は、以下のように、この戦争により神の国が成就することを述べている。それは福音を信じて実現するとも述べている。

・日近づきぬ：今や未曾有の戦禍が全世界を蔽うてゐる。日本の対米英開戦により世界は大変局に臨んだのである。…神は是によりて経綸を勧め給ふ。…眼ある者は見よ、…而して神の国は遂に必ず成就する事を<sup>67</sup>。

・信仰短言：日本精神 浅薄な唯我独尊的な日本精神と欧米殊に米国のモダーニズムに毒された近代精神とから完全に脱却して昔ながらの大和心に立ち還らねばならない。而して其上に聖書の福音を迎えよ！<sup>68</sup>

・編集室より：日米会談は我らの祈にも拘らず遂に平和的解決を見ずして

戦禍は太平洋に波及するに至った。…祖国のため切に祈らざるを得ない。…世界の戦禍の拡大は私をして聖書に対する信仰をいよいよ切ならしめる。時代の動きを見つつ神の国の近づきつつあるを切に思ふ。基督者は既に世と己とに死んだ者であるべきであるから斯かる時代に於てこそ信仰が鍛錬される。祈の時である。忍耐の時である<sup>69</sup>。

1943年4月18日に、連合艦隊司令長官山本五十六が、ブーゲンビル上空で米軍機の攻撃により戦死した。金澤は、この事件をとりあげ、以下のように、信仰を持って戦うことを述べている。

・山本元帥の死：此戦死が、福音の戦士たる私をして死して後なほ己まざるの意気もて信仰の善き戦闘を戦ふべく決意を新たならしめるのである70。

1944年戦争末期において、金澤は以下のように信仰を持って戦う事と厳しい時局を説明する。

・内外の戦ひいよいよ烈しく、私自身が此の千載一遇の時局に直面し信仰を戦ひ抜く事の重大責任を痛感する。多くの戦友等も亦、奮戦しつつありて傷つく者、戦死する者相つぐ<sup>71</sup>。

## 6 再臨思想

内村鑑三と中田重治により1918年から大正時代の再臨運動が開始された。金澤は、1918年に26歳で東京帝国大学を卒業して内務省に就職して神奈川県庁に赴任した。信仰を持つのは翌年になる。したがって、内村の再臨運動に参加はしていないが、以下のようにキリストの再臨により真の平和が到来する思想は持っていたことがわかる。

・編集室より：キリスト再び来り給ふことによりて全地に神の専制が実現するであらう<sup>72</sup>。

・世界平和は如何にして来るか 第一に凡ての人がキリストを信ずるに至る時、平和は自づと実現する。併しこの事は実現困難であらう。…第二はキリストの再び来り給ふ事によりて此世が亡ぼされ神の国が実現する時平

和は成る<sup>73</sup>。

・真の平和は基督の再臨によりて臨むのである。その日の来るまで世に戦争はたへないと聖書は預言してゐる<sup>74</sup>。

・編集室より：斯くて主の再臨の日まで欧州に平和は臨まないのであらうか。ああ信なき世なる哉<sup>75</sup>。

・信仰短言：再臨待望 我らに大なる希望がある。それはキリスト再び来り給ふことである。世の暗黒時に際し私は此の希望に胸躍らす者である<sup>76</sup>。

真の平和はキリストが再臨した時に到来する、という金澤の思想は、内村鑑三と同じである。再臨思想が継承されていることがわかる。

## 7 ナチス・ドイツ、ヒトラー批判

日本はドイツと1936年11月に日独防共協定に調印し、1940年9月には日独伊三国同盟を締結した。金澤は、1933年8月の段階から、ナチス政権を厳しく非難している。ナチスによるユダヤ人と知識人への迫害、流血事件を批判し、ナチス政権を「悪魔的正体」「悪魔的暴力政治」と断じている。さらにドイツ国民は「神を棄ててサタンの奴隷になった」、最終的には神の裁きにあうとさえ述べている。いづれも歴史的に証明された言説である。

・最近ニュールンベルヒで二百余名のユダヤ人が捕縛され市中を引き廻されたといふ。…彼らの為に祈らざるを得ない<sup>77</sup>。

・ああ独逸よ！ ナチスの治下に漸く国家の基礎が確立したと伝えられてゐたドイツに、最近、戦慄すべき流血事件が突発したそれは実にナチス内訌の激化である。…今回の如き流血沙汰を惹起した事により此の政権の悪魔的正体を曝露したものと言ふべきであらう。…就中、理由は如何にもあれユダヤ人を虐殺し、ユダヤ人の大学教授を教壇より追放せし事など正気の沙汰とは受け取れなかつた。…ああ、あはれむべきドイツ国民よ。汝らは血迷っている。汝らの理性は狂ひ汝らの信仰は失せてゐる<sup>78</sup>。斯くも偉大なる貢献を人類史上にもたらしたる民族が今や悪魔的なる暴力政治

を謳歌するに至らうとは！汝らは神を棄てて自らサタンの奴隷となつたのだ<sup>79</sup>。

・ナチスは悪い。併し独逸国民中の少数者は国のため憂慮を抱いてゐるにちがひない。彼らには同情すべきだ<sup>80</sup>。

・科学の勝利か：換言せばナチス精神とは道義を無視して武力を以て他国を自己に従属せしめんとする野心にすぎない。即ち自国の野望を達成せんが為の中立法規を犯し殆んど何等の防備なき中立諸国を蹂躪して恥づる所がない。故に斯くの如き精神は決して謳歌すべきではないのは勿論のこと、之に倣ふべきでなく、唾棄すべきである。真の日本精神は道義の上に立つ。ナチス精神と全く異ふことは多言を要しない。…而して必ず公平なる審判が行はれる。そのとき独逸に臨む審判が最も厳しきものであることは疑う余地がないのである。…ルーテルの信仰を棄ててナチス精神を採用せる独逸は禍ひなるかな。独逸のため長嘆息せざるを得ない<sup>81</sup>。

・罪との戦い：独逸はやがて神の烈しき御怒を蒙らざるを得ないであらう<sup>82</sup>。

## 8 大東亜共栄圏のキリスト教化

戦争の時期に金澤が最も多く記事にしたのは、戦争に勝利して、欧米に代わって、日本がキリスト教国になって、東洋に、そして世界に平和を実現していく、という言説である。

・日本人は何よりも先づ日本人たる自覚に立ち日本独自の靈的にして平和的なる文明を築いて世界に貢献すべき使命を有つてゐるのである。…聖書そのままのイエスの生命—神の言の種子—が野趣ある日本人の心の土壤に落ちつるならば其處から日本独特の基督教が興るのである<sup>83</sup>。

・人生の先決問題 日本人の基督教は愛国心を鼓舞するものでなければなりません。…平和と正義とによる靈的文明こそ日本が世界に貢献すべきものではありませんか<sup>84</sup>。

・欧州文明が没落して東洋諸国が目覚めんとしてゐます。支那も印度も産

みの苦痛をなしてゐます。やがて東洋が世界を支配する時代が対に到来するのでせう。日本は東洋の先駆者です。基督教がこの新時代の日本に対して負へる使命、また日本が基督教によつて世界に果すべき使命の重き事を切に感ぜざるを得ません<sup>85</sup>。

また、1937年7月に日中戦争が開始されたにもかかわらず、金澤は敵国民である中国人の将来に希望を持ち、中国伝道により東洋平和を実現しようとも述べている。

・編集室より：(矢内原忠雄訳『奉天三十年』書評) 多くの人が支那人の欠点のみを指摘する中に著者は彼らの長所を挙げ基督教的国民としての支那の将来に多大の希望をつないでいる。この事こそ興亜の全責任を負ふ我ら日本人が著者より十分に学び且つ反省すべき点である<sup>86</sup>。

・支那伝道の責任：我が国は如何にせば支那を再建し且つ彼我の精神的一致を招来し得べきかといふ真に重要にして然も最も困難なる問題に直面したのであります。…然らずんば東洋平和は実現しないからです<sup>87</sup>。

1955年5月5日、金澤は、道正安治郎により世田谷区に創立された無教会系学生寮である春風学寮の創立10周年記念感謝会に出席して、感話を述べた。日本精神はキリスト教によって「聖化」され、東亜を復興して平和を実現してほしいと、以下のように同学寮生に語っている。

・日本に要する人(五月五日、春風寮創立十周年記念感謝会感話に加筆して)：日本はどうかといへば、東亜建設といふ非常に困難な問題に直面してゐます。真の日支の平和、ひいては東洋の平和を建設するといふことは容易な事ではありません<sup>88</sup>。此の大和魂を国民各自が徹底的に生きることが私は刻下の急務であると思ひます。…大和魂は基督教によりてさらに更に聖化され、基督教は大和魂の上に蒔かれてよき実を結ぶのであります。…従つて卒業後は多く満州その他、大陸の各地で働く方々でせう。諸君が高き理想を以て勉強し将来の東亜を荷ふ人物となつてほしいのです。…かかる精神をもち、理想をもつた人々が…東亜を復興し平和を実現することが出来るのであると信じます<sup>89</sup>。

1939年、3月に宗教団体法が衆議院で可決され成立し、5月にノモンハン事件、12月には朝鮮総督府が朝鮮人に対して創氏改名を強制している。そのような状況であるが、金澤は、「興亜」のために中国人を愛すること、また日本人は罪を棄てる事を、以下のように勧めている。

・興亜：我らは思ふ、民国人の為に己を捨つる愛の精神こそ興亜の真の源動力であると<sup>90</sup>。

・富嶽に寄す：今や東亜の覚醒の秋なり。凡ての日本人がその不信、独善、利己、汚穢を捨てて汝（富嶽）の如く気高く生くべき秋なり。…斯くしてこそ我らは真に全東亜、否、全世界に貢献し得るなり<sup>91</sup>。

1941年12月8日に日米開戦になると、金澤は、日本には東亜に平和を築く使命があると以下のように、より強く主張している。またキリスト教が日本精神を「聖化」して、世界人類に貢献するとも述べている。

・日本精神と基督教：基督教によりて日本精神の特色たる清浄を始め赤心も忠義も滅私も正義も仁愛も平和も愛国もいよいよ聖化され強化されます<sup>92</sup>。日本が東亜のため、ひいては全人類の為に大なる貢献を全うし得んが為に是は歪曲されてはならないのです<sup>93</sup>。日本が東亜の盟主となりて世界人類に貢献せんとするに当り日本人が聖書の基督教を受くるか否かはその影響が実に重大であると思ひます<sup>94</sup>。更に日本が今後に於て最も必要とするものは東亜諸民族に対する仁愛と誠実です<sup>95</sup>。今や日本から支那を始め東亜の各地に純なるキリストの愛を宿す真の日本人が進出すべき秋であります<sup>96</sup>。私共は日本から旭日の如くにキリストの真理が現れ出て全東亜を輝かすのみならず遠く欧米までも照すに至るべき時を幻に見るのです。「起きよ、光を放て…」との声を聞くのです。二千六百年の光輝ある歴史と世界無比の国体と富嶽を有ち万世一系の皇室を戴く日本国には必ずや斯かる大使命が負はされてゐるのであります<sup>97</sup>。

・梅花に寄せてエレミヤを想ふ：我らもまた今、世界の大転換期に際会してゐる。…全東亜の覚醒の秋、全世界の産の陣痛の時<sup>98</sup>。ヨハネ伝講解：我らも今、未曾有の世界の大転換期に際会している。…少なくとも全東亜の

覚醒の日であり、何よりも日本人覚醒の日でなければならない<sup>99</sup>。

・新日本の礎石：今は、祖国はいふまでもなく、東亜にとり、否、更に世界にとりて誠に未曾有の非常重大な時期であります。…日本の基督教が其のままの形で他国に及ぶのではなく、支那には支那、秦には秦、それぞれ独自の基督教の起ることの必要を指すのです<sup>100</sup>。生けるキリスト：東亜の光はいつこにあるか。キリストにある<sup>101</sup>。

・祖国に寄す：先頃畏くも聖上陛下には親しく伊勢神宮に御参拝あらせらる。今や時局の緊張いよいよ其の度を加へつつあるを思ふ。…之（基督教）を受容れて真に世界に冠たる道義国家たらしむるべきであらう。これ当面の大試練に対し、また大東亜諸民族の指導者たる使命達成の爲にも必須の事であると信ずる<sup>102</sup>。

・彼（イエス）は今や欧米を去り枕する所なき旅人として東洋の地を歩み給ふ。東亜の諸国民よ、彼が己が心の馬桶に迎えよ<sup>103</sup>。

## 9 賀川豊彦批判

金澤は、賀川豊彦による神の国運動を批判する。それは、賀川が、神の御業を、伝道計画や資金募集という「人間の知恵による伝道」にしていることへの批判である。

・神の業か人間の業か：視よ、多くの教会が世を救はんとして伝道計画をなし資金を募集する。…信仰ではなくて事業ではないか。伝ふる所によれば賀川豊彦氏は昨冬北米ニューヨークに於いて次の如き主旨の演説をなしたとの事である。…神の国運動の第三期の計画とよ！之は全く人間の知恵と計画による伝道ではないか。…私は賀川氏に於て現代日本の基督教会の最も憂うべき痼疾を見る。それは伝道が専ら神の聖なる御業なるを忘れて之を人間の計画運動となし、殊にアメリカの金に頼りて日本の伝道をなさんとする依頼心之である。…実に救は神の御業である<sup>104</sup>。

## 10 「神の鞭」論

太平洋戦争が開始されて当初、日本軍は連戦連勝した。1942年1月にはフィリピンのマニラを占領し、2月にはシンガポールをも占領した。同年2月に、金澤は以下のように、日本が墮落した欧米諸国に対する「神の審判の鞭」になったとの「神の鞭」論を述べている。

・世界大動乱と基督教 欧米諸国の墮落 欧米基督教会の俗化 米英に就て：是は米国の背信と墮落及び米英の東亜に於ける過去の罪惡に対する神の審判であると思はれます。…日本は英米の背信と貪欲とに対する神の審判の鞭となったのであると私は信じます<sup>105</sup>。建国の高き精神を忘れマンモンを拝するに至りし現代のバビロンたる米国、搾取と貪欲と偽善とを以て弱小民族を厭制して来た英国を日本の手を以て打ち給ふといふことは可能であります。今、日本の為すべきことは…専ら弱小民族解放といふことにあると思ひます。即ち英米の轍に鑑みて正義と人道と真の愛とを以て彼らを率ゐることがもっとも緊急事であります。二、日本人と基督教：真に東亜を率ゐるに足るところの道義的国家として立ち、世界に新光明を与ふるに足る大国民の襟度を有するものとならなければなりません<sup>106</sup>。

## 11 結論—整理と課題—

当初、絶対的非戦論を唱え、キリストの再臨によって真の平和が到来すると信じる金澤が、なぜ戦争を支持し協力するようになったのであろうか。その経過をまとめると以下の四段階になる。

第一段階：欧米キリスト教文明に対する批判

第二段階：日本的基督教と天皇・国体との融合

第三段階：神と天皇のための戦争

第四段階・大東亜共栄圏のキリスト教化

今後の研究課題として、無教会に限らず他のキリスト教指導者により戦争時代に発行された雑誌をも分析して、その傾向を考察すること、そして、将来的には戦争の時代における諸外国のキリスト教の状況も比較研究すること

を挙げる。そうすることにより、戦争の時代におけるキリスト教の対応の普遍型を見いだせるに違いない。

## 注

- <sup>1</sup> 加藤常昭『自伝的伝道論』キリスト新聞社 2017年23-24頁。
- <sup>2</sup> 『通信』16(1934年4月)2頁。
- <sup>3</sup> 思想の科学研究会編『共同研究 転向』中巻 平凡社 1960年；武田清子『土着と背教』新教出版社 1967年；同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究』Ⅱ みすず書房 1969年；土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社 1980年；家永三郎『戦争責任』岩波書店 1985年；日本基督教団宣教研究所『日本基督教団史資料集第二編戦時下の日本基督教団(1941-1945年)』日本基督教団出版局 1998年；宮坂キリスト教センター『十五年戦争期の天皇制とキリスト教』新教出版社 2007年；キリスト教史学会『戦時下のキリスト教』教文館 2015年。
- <sup>4</sup> 藤田若雄編著『内村鑑三を継承した人々(上) 敗戦の神義論』木鐸社 1977年；無教会史研究会編著『無教会史第二期継承の時代』新教出版社 1993年；千葉真「十五年戦争期の無教会—非戦論と天皇制問題を中心に—」(宮坂キリスト教センター『十五年戦争期の天皇制とキリスト教』新教出版社 2007年)；高木謙次『高木謙次選集第六巻 戦時下無教会信徒の動向—特高資料を中心に—』キリスト教図書出版社 2016年。
- <sup>5</sup> 『日本基督教歴史大事典』教文館、1988年、312頁。
- <sup>6</sup> 『信望愛』第42号(1931年10月)巻頭。
- <sup>7</sup> 『信望愛』、第43号(1931年11月)巻頭。
- <sup>8</sup> 『信望愛』、33頁。
- <sup>9</sup> 『信望愛』、第45号(1932年1月)32頁。
- <sup>10</sup> 「絶対非戦はクリスチャンの当然の立場であらねばならぬと思ふ…真の平和の基礎は国際連盟ではない、之はイエスの十字架と其の再臨とにある」『信望愛』、第46号(1932年2月)1頁。
- <sup>11</sup> 『信望愛』、第47号(1932年3月)31頁。
- <sup>12</sup> 『信望愛』、第48号1頁。
- <sup>13</sup> 『信望愛』、第48号(1932年4月)2頁。
- <sup>14</sup> 『信望愛』、第60号(1933年4月)1頁。
- <sup>15</sup> 同、33頁。
- <sup>16</sup> 『信望愛』、第64号(1933年8月)28頁。

- 17 『信望愛』、第 66 号（1933 年 10 月）巻頭 この号は当局により発禁処分になった。
- 18 『信望愛』、第 68 号（1933 年 12 月）巻頭。
- 19 『信望愛』、第 68 号（1933 年 12 月）17 頁。
- 20 『信望愛』、第 96 号（1936 年 4 月）1 頁。
- 21 『信望愛』、第 97 号（1936 年 5 月）1 頁。
- 22 『信望愛』、第 105 号（1937 年 1 月）6 頁。
- 23 『信望愛』、第 108 号（1937 年 4 月）33 頁。
- 24 『信望愛』、第 111 号（1937 年 7 月）巻頭。
- 25 『信望愛』、第 145 号（1940 年 5 月）32 頁。
- 26 『信望愛』、第 192 号（1943 年 6 月）7 頁。
- 27 「明治、大正、昭和を以て欧米物質文明の害毒が此国を全く腐敗せしめた。共産主義とアメリカニズム。これに加ふるに極端なる国粹主義の台頭」『信望愛』、第 49 号（1932 年 5 月）巻頭。
- 28 「審判の公平：斯く判断するならば罪は連合側にもドイツ側にもあることは明白でありそれが互いに因果をなして今日に至りしを見る。明白には見るを得ざれども公平なる天の審判が両方に対して行はれてあることを知るのである。…キリストの十字架の外に欧州の平和はない。」『信望愛』、第 138 号（1939 年 10 月）8-9 頁。
- 29 「基督教国の没落：基督教が国家的勢力となるに及んで其の俗化が始まったのである。…基督教は彼ら（欧米諸国）を離れた。…今や基督教は東洋に於て、殊に日本に於て新たなる光を放たんとしてゐるのではあるまいか。『信望愛』、第 146 号（1940 年 6 月）1 頁。
- 30 「信仰短言：今度の欧州戦争の惨禍は正しく基督教諸国の背教に対する神の審判である。」『信望愛』、第 147 号（1940 年 7 月）3 頁。
- 31 『信望愛』、第 56 号（1932 年 12 月）巻頭。
- 32 同、2 頁。
- 33 『信望愛』、第 57 号（1933 年 1 月）24-25 頁。
- 34 同、25-26、32 頁。
- 35 『信望愛』、第 60 号（1933 年 4 月）1-2 頁。
- 36 『信望愛』、第 66 号（1933 年 10 月）28 頁。
- 37 『信望愛』、第 77 号（1934 年 9 月）22-23 頁。
- 38 『信望愛』、第 81 号（1935 年 1 月）10 頁。
- 39 『信望愛』、第 107 号（1937 年 3 月）1 頁。
- 40 『信望愛』、第 108 号（1937 年 4 月）21-22 頁。

- 41 『信望愛』、第 175 号（1942 年 11 月）3 頁。
- 42 『信望愛』、第 176 号（1942 年 12 月）1 頁。
- 43 『信望愛』、第 57 号（1933 年 1 月）22 頁。
- 44 『信望愛』、第 58 号（1933 年 2 月）33 頁。
- 45 『信望愛』、第 64 号（1933 年 8 月）27 頁。
- 46 『信望愛』、第 68 号（1933 年 12 月）18 頁。
- 47 『信望愛』、第 70 号（1934 年 2 月）19-22 頁。
- 48 『信望愛』、第 82 号（1935 年 2 月）巻頭。
- 49 『信望愛』、第 85 号（1935 年 5 月）巻頭-1 頁。
- 50 『信望愛』、第 93 号（1936 年 1 月）40 頁。
- 51 『信望愛』、第 96 号（1936 年 4 月）4, 5, 34 頁。
- 52 『信望愛』、第 104 号（1936 年 12 月）31 頁。
- 53 『信望愛』、第 105 号（1937 年 1 月）1 頁。
- 54 『信望愛』、第 108 号（1937 年 4 月）20 頁。
- 55 『信望愛』、第 111 号（1937 年 7 月）2 頁。
- 56 『信望愛』、第 129 号（1939 年 1 月）40 頁。
- 57 『信望愛』、第 152 号（1940 年 12 月）20 頁。
- 58 『信望愛』、第 64 号（1933 年 8 月）巻頭。
- 59 『信望愛』、第 86 号（1935 年 6 月）巻頭。 この号は当局によって出版が禁止されている。
- 60 『信望愛』、第 138 号（1939 年 10 月）1-2 頁。
- 61 『信望愛』、第 178 号（1943 年 2 月）20 頁。
- 62 『信望愛』、第 64 号（1933 年 8 月）29 頁。
- 63 『信望愛』、第 96 号（1936 年 4 月）2 頁。
- 64 『信望愛』、第 113 号（1937 年 9 月）40 頁。
- 65 同。
- 66 同、40 頁。
- 67 『信望愛』、第 165 号（1942 年 1 月）巻頭。
- 68 同、4 頁。
- 69 同、23 頁。
- 70 『信望愛』、第 182 号（1943 年 6 月）1 頁。
- 71 『信望愛』、第 192 号（1944 年 5 月ガリ版刷）2 頁。
- 72 『信望愛』、第 64 号（1933 年 8 月）32 頁。
- 73 『信望愛』、第 78 号（1934 年 10 月）8 頁。
- 74 同。

- 75 『信望愛』、第 138 号 (1939 年 10 月) 8-9 頁。
- 76 『信望愛』、第 148 号 (1940 年 8 月) 4 頁。
- 77 『信望愛』、第 64 号 (1933 年 8 月) 32 頁。
- 78 『信望愛』、第 76 号 (1934 年 8 月) 1 頁。
- 79 同、2 頁。
- 80 『信望愛』、第 137 号 (1939 年 9 月) 33 頁。
- 81 『信望愛』、第 146 号 (1940 年 6 月) 2-3 頁。
- 82 『信望愛』、第 149 号 (1940 年 9 月) 1 頁。
- 83 『信望愛』、第 78 号 (1934 年 10 月) 1 頁。
- 84 『信望愛』、第 81 号 (1935 年 1 月) 19 頁。
- 85 『信望愛』、第 108 号 (1937 年 4 月) 24 頁。
- 86 『信望愛』、第 130 号 (1939 年 2 月) 40 頁。
- 87 『信望愛』、第 132 号 (1939 年 4 月) 卷頭。
- 88 『信望愛』、第 134 号 (1939 年 7 月) 17 頁。
- 89 同、20 頁。
- 90 『信望愛』、第 137 号 (1939 年 9 月) 8 頁。
- 91 『信望愛』、第 166 号 (1942 年 2 月) 卷頭。
- 92 『信望愛』、第 166 号 (1942 年 2 月) 14 頁。
- 93 同、16 頁。
- 94 同、17 頁。
- 95 同、18 頁。
- 96 同、19 頁。
- 97 同、20 頁。
- 98 『信望愛』、第 167 号 (1942 年 3 月) 卷頭。
- 99 『信望愛』、第 167 号 (1942 年 3 月) 卷頭。
- 100 『信望愛』、第 168 号 (1942 年 4 月) 2 頁。
- 101 同、7 頁。
- 102 『信望愛』、第 177 号 (1943 年 1 月) 卷頭。
- 103 『信望愛』、第 188 号 (1943 年 12 月) 1 頁。
- 104 『信望愛』、第 94 号 (1936 年 2 月) 卷頭。
- 105 『信望愛』、第 166 号 (1942 年 2 月) 8-9 頁。
- 106 同、10 頁。

Non-Church Movement during the War Period  
—Tsuneo Kanazawa—

Tomobumi KUROKAWA

**ABSTRACT**

In early days, KANAZAWA Tsuneo advocated absolute pacifism and believed in the realization of true peace by Christ's Second Advent. But why did he turn to support the war and cooperate with war efforts? The process of his change can be described in the following four phases:

First phase: Criticism on Western Christian Civilization

Second phase: Integration of Japanese Christianity and the Emperor/  
National Polity

Third phase: War for God and the Emperor

Fourth phase: Christianization of the Greater East-Asia Co-Prosperty  
Sphere

Considered as future research work subjects are the analyses of magazine articles by other leaders of the Non-Church Movement published during the war period, and comparative studies on the situations of Christianity in other countries during the war time.